博物館の全機能をふまえた学芸活動のあり方

― 資料紹介「帰化植物」の実践から ―

Practice of Exhibition "Naturalized Plants" supported by the collectction, researches and educational activities

小野木　三郎*
Saburo Onogi

はじめに

博物館法を持ち出すまでもなく，博物館は，①資料を収集し保存する．②展示と事業活動をする．③調査研究をする．…… 機関であるとされている。いいかえれば，博物館は，資料の収集保存・調査研究・教育の三本柱によって支えられ，この三機能の有機的な結合体こそが博物館の実体であるともいえる．

ところが，法律の精神や博物館学の理論とは裏腹に，現実の日本の博物館界は，多くの問題と矛盾をかかえている．全国的に，大規模な公立博物館が誕生する中で，単純明解な博物館の三機能という基本線すら，十分理解されていない面がある．たとえば，学芸員として職員が配属されてはいても，待遇は事務職員扱いで，自費研修すら困難な現実がある．博物館の専門職員としての学芸員職すら確立されていないといっていい。また予算的な面でも，資料購入費・資料収集旅費・調査研究費等に不足したり，全くそれらが認められていない館園があるなど，やゝもすると展示室を公開し，維持管理するだけ，これに教育普及事業が加わるといったのが実情ということはないだろうか．

しかし，博物館は現実に幾つも存在している．いかにあるべきかの理論ばかりが花やかでも，実践が伴なわなくては空論にすぎない．現実に博物館にいる職員 ―― そこで働いている学芸員自身が，博物館の使命，その社会的責任の重さをかみしめて，三機能の発揮に，最大限の努力，創意工夫をすべきである．予算がないからと泣きごとを言う前に，あるいは，博物館への理解が欠けていると嘆く前に，博物館人としての最善の努力，悪戦苦闘を覚悟しなければいけない．

その意味から，資料収集と保存，研究，教育という三本柱をふまえた学芸活動の事例として，ささやかな実践記録を報告し，大方のご批判を仰ぎ，今後の参考にしたいと思う．

1. 資料収集と調査研究について

博物館自然史分野の資料収集と調査研究は，無目的に何でも手当りしだいに集め，それらの資料について研究するなどということは許されるはずがない．その地域の自然の特性を浮きぼりにし，自然の歴史的な変化を明らかにすることが主目的で，そのための資料収集と保存が行なわれるべきである．しかし，日本の多くの博物館では，その面での純粋な調査研究費や資料収集費に恵まれていないのが現実の姿で，多くの館園でも，外部からの調査研究依頼を受けたり，文部省の科学研究助成金などを受けたりして，調査研究・資料収集の実績を挙げていることがある．

私の場合は，昭和53年度には，奥濃飛越観光連盟と白山国立公園岐阜県協会とが企画された「白山山麓一帯動植物調査」の植物分野の調査に従事し，資料収集と野外生態調査を実施した．その調査研究内容は，岐阜県博物館研究紀要第1号（昭和54年）に「白山北縦走路の植生（第一報）」として発表し，　葉標本は館蔵資料として整理中である．続いて昭和54年度は，文部省の科学研究費補助金（奨励研究B）の交付を受け「岐阜県下の帰化植物相とその分布並びに地域・環境のちがいと侵入程度の実態調査」なるテーマで，資料収集と野外生態調査を

原稿受理 1980年6月12日
* おのぎ　さぶろう
岐阜県博物館
連絡先（勤）
〒501-32　関市小屋名・百年公園内
（電話）05752-8-3111（代）

実施した．

帰化植物の実態調査がまったくなされていない岐阜県下において，

①過去の文献，県内各地の協力者からの情報資料提供により，岐阜県内産帰化植物目録づくりを進め，その過程の中で腊葉標本の収集整理を行ない，その成果をふまえて，特定種の分布図づくりをする．

②都市化現象の著しい各務原市内（長い間米軍基地が存在し，飛行場がある帰化の入口）で，いろいろな環境での草地群落調査を行ない，帰化種の侵入実態を明らかにする．

③山岳地を代表する意味で，御岳山飛騨登山路に沿った高度別の草地群落調査を行ない，帰化種の侵入実態を明らかにする．

以上3つの目的をもって，各務原市内で19ケ所，御岳山で12ケ所，延べ18日間の野外調査を行なった．調査研究結果の詳細は，別に本館の研究紀要第2号に報告するが，現時点までに確認できた県内産帰化植物は，37科214種（変種等を含む）であった．

2. 調査研究と教育事業について

博物館は，ある一面では研究機関でもあり，調査研究が，展示や教育事業のためだけの手段や背景として位置づくものでないことは当然である．しかし，博物館が，大学等の他の研究機関と違っているところは，また違わなければならないところは，その調査研究の成果を，研究紀要や学術雑誌等に論文発表するだけに終わらず，「もの」という具体物を通して，展示発表するところに，特色と存在価値があるはずである．そこで，1年間の調査研究の成果と，その間に収集した資料をもとに，昭和55年3月1日～30日の1ケ月間，手づくりによる資料紹介「帰化植物」を開催した．

3. 資料紹介「帰化植物」の実施内容の大要

①ねらい　本館が収蔵している腊葉標本資料を主とした植物関係の諸資料及び昭和54年度科学研究費補助金を得て行なった調査研究成果の一部を紹介し，帰化植物についての基礎的な知識の普及に努める．

②展示構成

(ア)事前調査から

展示構成を考える参考資料として，小・中・高校生各1クラスという少人数ではあったが，帰化植物についての認識度をみるアンケート調査を行なった．その結果，予想に反して帰化植物ということばが浸透していないことがわかった．そして，近頃マスコミにもよく登場するセイタカアワダチソウやブタクサ，セイヨウタンポポでも，野外で実物が見分けられると答えた者は30%足らず，過半数の者は，名前は聞いたことがあっても，実物を知らないか，名前すら聞いたことがないと回答した．その他，ごく普通に見られる帰化植物20種についても，実物が見分けられると回答したものは，ほとんど皆無に近い状態であった．また自由に記入させた疑問に思うこと…としては，「帰化植物とはどういうものですか」が非常に多く，その他目立ったものでは，「日本にどれくらいの種類があるのか」「どんなところに生えているのか」「いつごろからあらわれたのか」「日本のものと，どこが違うのか」「帰化植物の特色や性質はどんなものか」「日本から外国へ行ったものはあるのか」などがあった．

以上のようなアンケート調査結果をもとに，まず第一に考えた展示構成の柱は，実物標本を数多く提示して，帰化植物により多く接していただくこととした．その過程で，帰化植物とは何であるかの概念を示し，日本に住みついた種類数の多さ，あるいはその形態・生態を扱い帰化植物への関心を高め，身のまわりで今何が起こっているかの事実に目を向けてもらうことを願って，図示したような展示構成とした．（図1，写真1～11）

(イ)展示にあたって留意したこと

本館では，特別な展示普及事業としては，多額な予算措置のある「特別展」が年3回開催され，その間に，学芸員の手づくりによる資料紹介が，年2回開催されている．そこで手づくり展示に当たって留意したことは，

ⓐ解説パネル・図表等は，これまでの特別展「世界の貝」や「濃飛の文人」で使われたものを活用し，前の文字・図表面の上に色画用紙をはりつけ，マジックやポスターカラーで描いた．（写真 6,8,9,10,11参照）

ⓑ展示の流れに変化をもたせ，現場の生態を示すために，四ツ切大カラー写真21点を配し，色彩感を出すようにした．

ⓒ手許に撮影収集されている限りのサービス判カラー写真を，腊葉標本に添えて展示し，生きている時の植物体の色彩を見せるようにした．

ⓓ帰化植物が外国産の植物であることを印象づけるために，Flower Fairies シリーズや The observer's book of wild Flowers 等のコピーを作成し，できる限り標本に添えて展示した．

ⓔ「日本のものと比べてみよう」のコーナーでは，在来種の植物名をうたい込んだ俳句や和歌を，水彩画入りの毛筆書きで背後に提示し，興味づけるようにした．

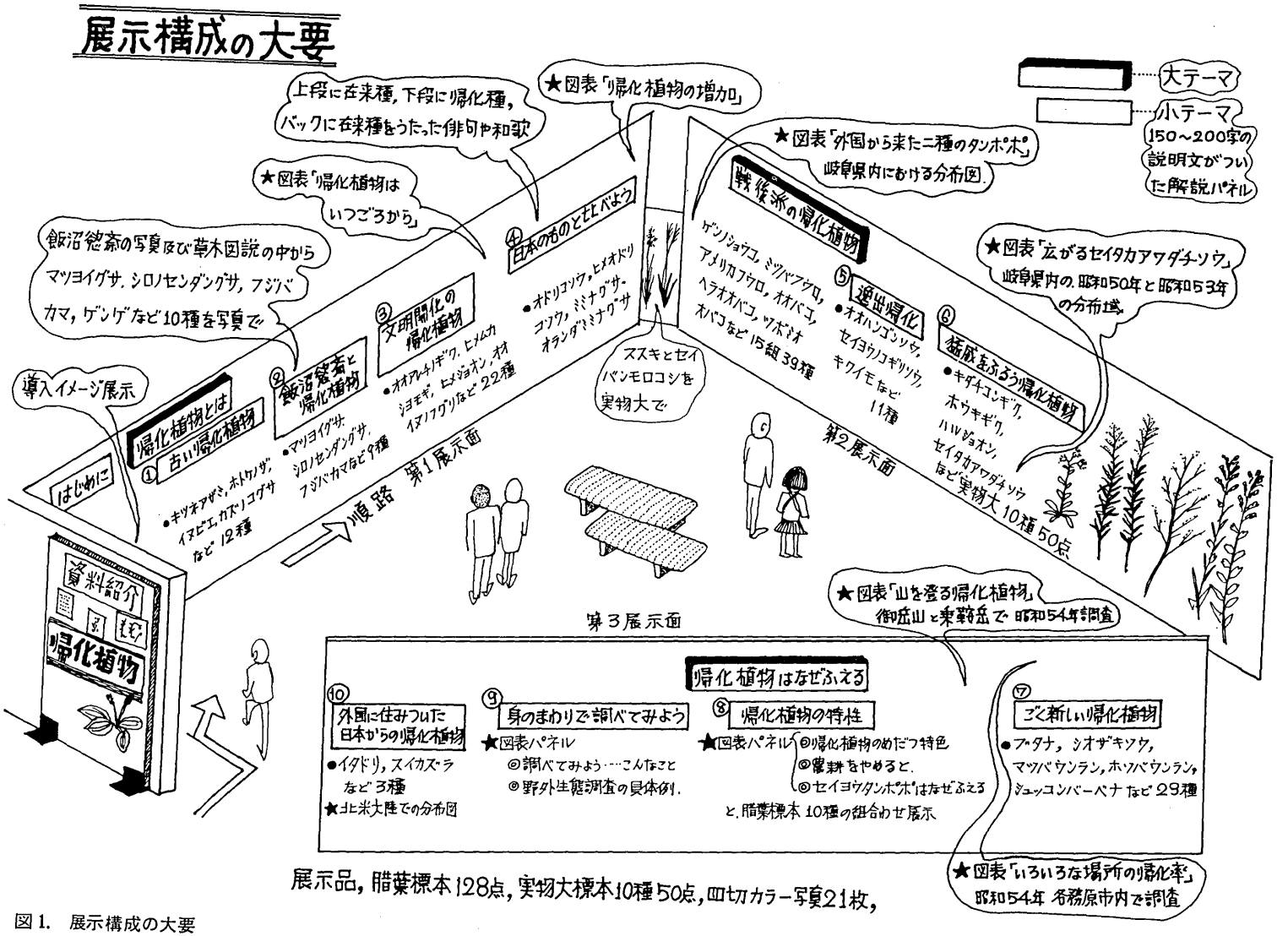

展示構成の大要
大テーマ
小テーマ
150～200字の説明文がついた解説パネル
★図表「帰化植物の増加」
上段に在来種，下段に帰化種，バックに在来種をうたった俳句や和歌
★図表「帰化植物はいつごろから」
飯沼慾斎の写真及び草木図説の中からマツヨイグサ，シロノセンダングサ，フジバカマ，ゲンゲなど10種を写真で
導入イメージ展示
はじめに
帰化植物とは
① 古い帰化植物
●キツネアザミ，ホトウガザ，イヌビエ，カズノコグサ など 12種
② 飯沼慾斎と帰化植物
●マツヨイグサ，シロノセンダングサ，フジバカマなど9種
③ 文明開化の帰化植物
●オオアレチギク，ヒメムカシヨモギ，ヒメジョオン，オオイヌノフグリなど22種
④ 日本の志のとびとびよう
●オドリコソウ，ヒメオドリコソウ，ミミナグサ，オランダミミナグサ
ススキとセイバンモロコシを実物大で
順路 第1展示面
★図表「外国から来た二種のタンポポ」岐阜県内における分布図
戦後派の帰化植物
ゲンノショウコ，ミツバアケビ，アメリカフウロ，オオバコ，ヘラオオバコ，ツボミオオバコなど 15組 39種
⑤ 逆出帰化
●オオハンゴンソウ，セイヨウノコギリソウ，キクイモなど 11種
⑥ 猛威をふるう帰化植物
●キダチコンギク，ホウキギク，ハルジョオン，セイタカアワダチソウ など実物大 10種 50点
★図表「広がるセイタカアワダチソウ」岐阜県内の，昭和50年と昭和53年の分布域
第2展示面
★図表「山を登る帰化植物」御岳山と乗鞍岳で 昭和54年調査
資料紹介
帰化植物
第3展示面
帰化植物はなぜふえる
⑩ 外国に住みついた日本からの帰化植物
●イタドリ，スイカズラ など 3種
★北米大陸での分布図
⑨ 身のまわりで調べてみよう
★図表パネル
◎調べてみよう……こんなこと
◎野外生態調査の具体例．
⑧ 帰化植物の特性
★図表パネル
◎帰化植物のめだつ特色
◎雑草をやめると．
◎セイヨウタンポポはなぜふえると，腊葉標本 10種の組合わせ展示
⑦ ごく新しい帰化植物
●ブタナ，シオザキソウ，マツバウンラン，ホソバウンラン，ジュッコンバーベナ など 29種
★図表「いろいろな場所の帰化率」昭和54年 各務原市内で調査
展示品，腊葉標本128点，実物大標本10種50点，四切カラー写真21枚，

図 1.　展示構成の大要

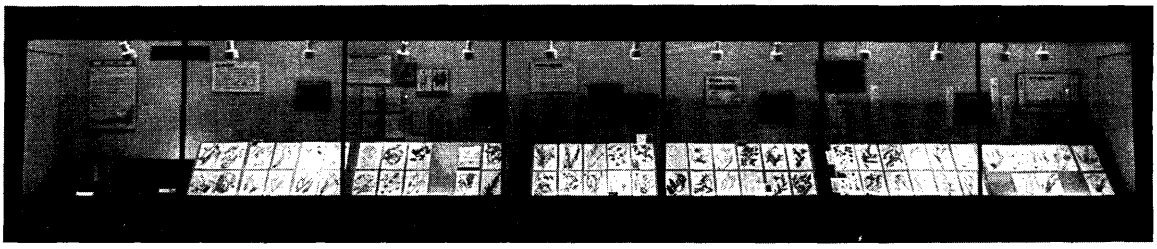


写真 1.　第 1 展示面全景

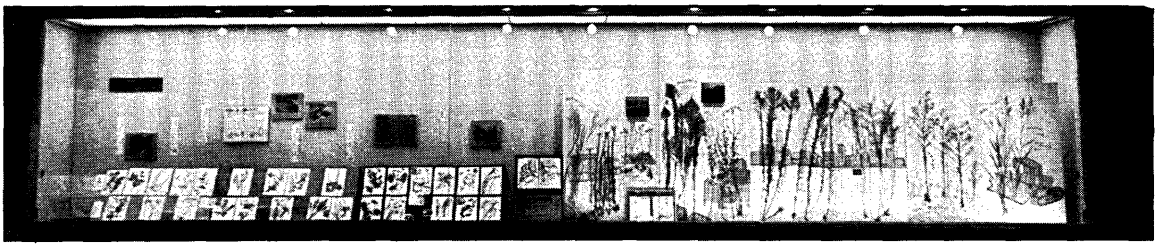


写真 2.　第 2 展示面全景

写真 3.　第 3 展示面全景

写真 4.　入口の案内看板

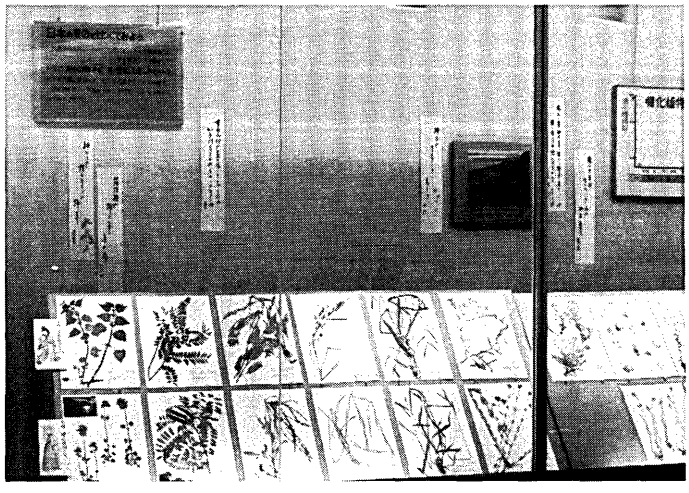


写真 5.　日本のものと比べてみようのコーナー

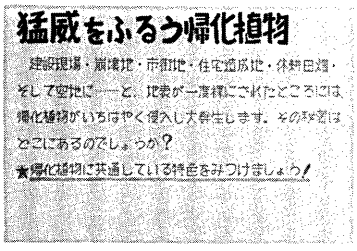
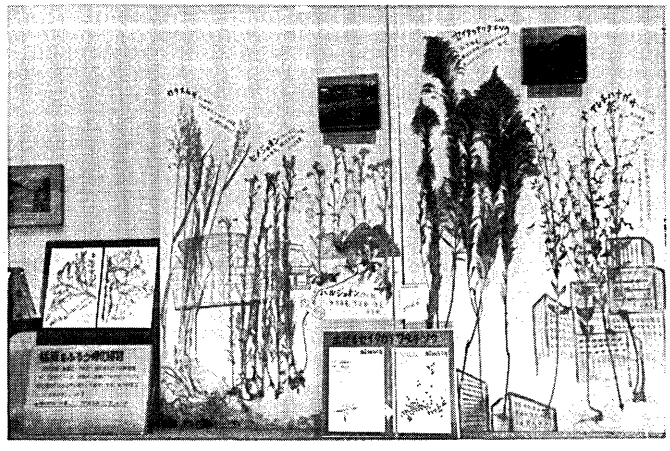


写真 6.　解説パネルの一例



▶ 写真 7.　猛威をふるう帰化植物コーナーの実物大標本展示の一部

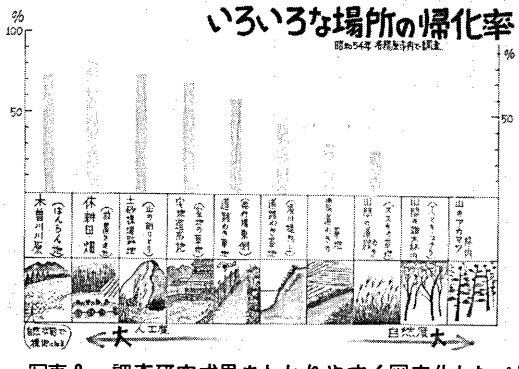


写真 8.　調査研究成果をわかりやすく図表化したパネル

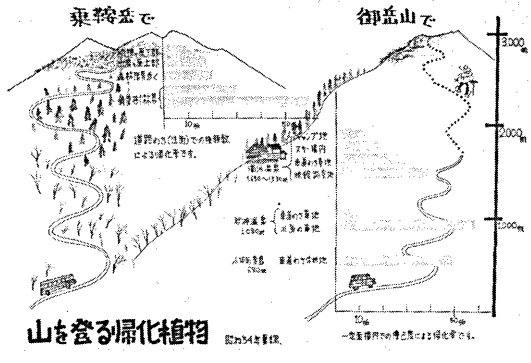
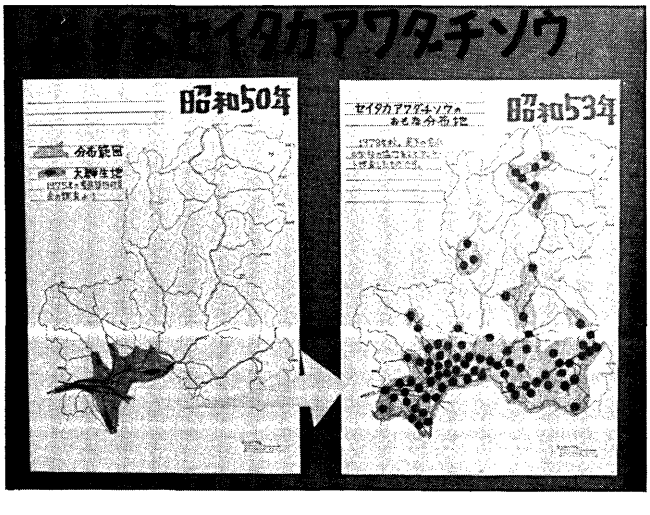
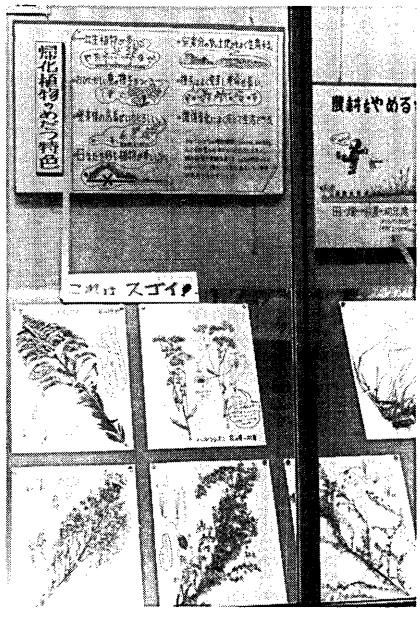


写真 9.　調査研究成果をわかりやすく図表化したパネル



▲ 写真10　分布図の一例



▶ 写真11　帰化植物の特性コーナーの一部

（写真5参照）

ⓕ「帰化植物の特性」コーナーなどでは，図表中の絵・文章と関連する標本とを，色紙テープで結びつけ，視点を明確にした．（写真11参照）

ⓖ「身のまわりで調べてみよう」のコーナーでは，方形わく調査法を紹介し，具体的な調査表，結果の処理法等を，生の素材を提示し，またこんなことも調べられますという具体的な調査事例を紹介して，だれにでも簡単にできる調査法を示すことによって，意欲化，実践化をねらった．

4. 関連教育普及事業について

展示室での見学を助け，理解の深まりをねらいとして，自作スライド2編を作成し，会期中の日・祭日に定期的上映会を開催した．また団体見学者等に対しては，事前の打合わせ会での希望に応じて，上映することとした．自作スライドの内容は，「帰化植物」…… 帰化植物とはどういうものであるかを中心テーマに，身のまわりに増えてきた帰化植物の由来・生態を紹介したもので，いわば概論入門編，50駒，上映20分．「帰化植物の生態」…… 調査研究の結果をわかりやすく紹介することを中心テーマにし，環境別の帰化率，御岳山での実態，調査方法等を紹介したもので，いわば生態編，50駒，上映20分．いずれもバック・ミュージック入りの解説テープまで自作した．

この外，会期中には，団体等の見学者で，事前に申し込みがあれば，帰化植物にかかわる自然教室を開催すること，また，移動教室的な催しとして，野外現地での観察会指導にも応ずることなどを，教育普及事業として考えた，

5. 広報活動について

世はまさに宣伝の時代である。ポスターが作成される特別展とは違って，この資料紹介では，広報手段としては，本館発行の「岐阜県博物館だより」（年3回発行），岐阜県発行の「くらしと県政」（月1回発行），及び県教委発行の「教育広報」（月1回発行）の紙面による行事案内があるだけである．しかし，これだけでは，対象が限られていたり，目立たない小記事であったりで，宣伝効果としては弱い．そこで，自作の宣伝用チラシを印刷し，事前に受付で配布したり，周辺部の各学校へ配布した．（図2）

しかし，最も強力な宣伝効果が期待できるのは，一般の日刊新聞やラジオ・TV等の報道機関である．そこで，県庁記者クラブを通じて，各社へ資料配布を行ない広報の依頼をした．その結果，TVは，地元の岐阜放送が，会期当初の夕方のニュースで報道し，ラジオは岐阜放送が，昼のワイド番組の中で，電話訪問という形で広報してくれた．

日刊新聞は，各社が行事案内の記事を出してくれたうえ，次のような強力な支援報道をしてくれた．帰化植物という．時流にマッチした内容が，報道機関に注目されたものと思う．

〈岐阜日々新聞〉

※3月7日　社会面　5段抜き見出し「空き地や野原に群生する帰化植物……生い立ち，実態を詳しく紹介」，写真2枚付，本文77行．

※3月14日　レジャー面　県博物館の資料紹介から　4段抜き見出し「暮らしの中の帰化植物（上）土地の自然度の証人」写真3枚付，本文113行．

※3月20日「同上（下）各務原基地も侵入路」写真1枚図表1枚付，本文90行．

〈中日新聞〉

※2月29日　岐阜県版　4段抜き見出し「帰化植物猛威……県博物館あすから標本展示」写真1枚付，本文85行．

※3月1日　少年少女欄「外国から渡ってきて群生……帰化植物の話」写真3枚付，本文108行．（図3）

〈朝日新聞〉

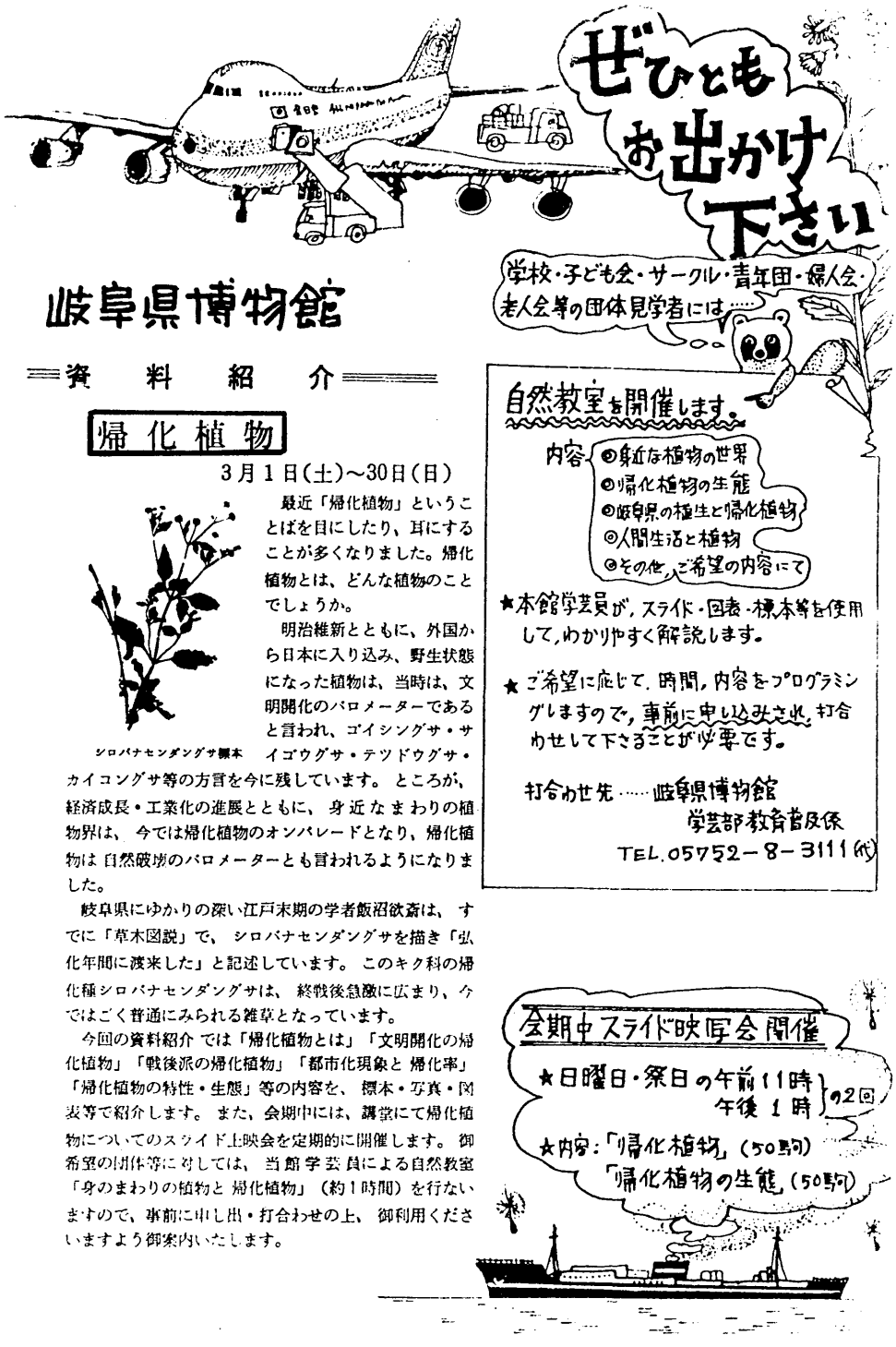
※3月1日　家庭欄　3段抜き見出し「勢力広げる帰化植物……人為加えた土地に多い．」写真3枚付，本文164行．

※3月10日　岐阜版月曜訪問　4段抜き見出し「調査に多くの協力者……」写真1枚付，本文133行．

6. 入館者からのアンケート結果について

3月いっぱいの入館者5,919人（小・中生2,424人，高・大生2,31人，一般3,264人）のうち，アンケートに応じてくれた人は，総数365人であった．その内訳は，県内在住者264人（72.3％），県外101人（27.7％），男子51.8％，女子48.2％であった．帰化植物とは，どんな植物であるのか，の理解度に対する設問では，よくわかった 35.1％，だいたいわかった 46.4％，よくわからなかった 18.5％という回答であった．また自由記入による「この展示でのよかったこと，わるかったこと」での記入内容では，

※よかったこと



最近「帰化植物」ということばを目にしたり、耳にすることが多くなりました。帰化植物とは、どんな植物のことでしょうか。

明治維新とともに、外国から日本に入り込み、野生状態になった植物は、当時は、文明開化のバロメーターであると言われ、ゴイシングサ・サイゴウグサ・テツドウグサ・カイコングサ等の方言を今に残しています。ところが、経済成長・工業化の進展とともに、身近なまわりの植物界は、今では帰化植物のオンパレードとなり、帰化植物は自然破壊のバロメーターとも言われるようになりました。

岐阜県にゆかりの深い江戸末期の学者飯沼欲斎は、すでに「草木図説」で、シロバナセンダングサを描き「弘化年間に渡来した」と記述しています。このキク科の帰化種シロバナセンダングサは、終戦後急激に広まり、今ではごく普通にみられる雑草となっています。

今回の資料紹介では「帰化植物とは」「文明開化の帰化植物」「戦後派の帰化植物」「都市化現象と帰化率」「帰化植物の特性・生態」等の内容を、標本・写真・図表等で紹介します。また、会期中には、講堂にて帰化植物についてのスライド上映会を定期的に開催します。御希望の団体等に対しては、当館学芸員による自然教室「身のまわりの植物と帰化植物」(約1時間)を行ないますので、事前に申し出・打合わせの上、御利用くださいますよう御案内いたします。

図 2. 自作の宣伝用チラシ

博物館学雑誌第6巻第1・2号合併号1～9ページ，1981年3月

No.

中日新聞　昭和55年(1980年)3月1日(土曜日)　(第3種郵便物認可)

少年少女 5

外国から渡ってきて群生

帰化植物の話

大人よりも背が高い戦後派の帰化植物の説明をする井波一雄さん(右)と小野木三郎さん(右)＝岐阜県関市の岐阜県博物館で

ポカポカと暖かい日が多くなった。日当たりのいい土手などでは草が春を待ちきれずに芽ぶき始めた。こうした草の中には〝青い目〟の植物があることを知っているかな？　帰化植物といって外国生まれで牧草にまじったり、船や飛行機のなかだちで日本に運ばれ野生化した植物だ。一日から岐阜県関市の百年公園内にある岐阜県博物館で「帰化植物」が特別展示（三十日まで）されている。そこで同館をたずね、学芸員の小野木三郎さんと井波植物研究所長の井波一雄さんに話をうかがってみた。

帰化植物は歴史的に三つに分けられる。イヌタデとかキツネアザミなど大むかしに渡ってきて、今では田畑の雑草になった〝古い帰化植物〟。ヒメジョオン、オオマツヨイグサなど明治のはじめころに増えた〝文明開化の帰化植物〟。経済成長や工業化が進んだ昭和二十五年ごろから群生して目立ち始めた〝戦後派の帰化植物〟だ。今回の展示ではだれでも目につく戦後派の帰化植物に重点がおかれている。

ノッポの戦後派

戦後派の代表的なものは、郊外（こうがい）のあき地や道ばたにさくセイタカアワダチソウやアレチハナガサ、セイバンモロコシなど。どれも背たけが高く目立つ。また、いつの間にか同種の帰化植物にとってかわられたものもある。かわいいタンポポは総苞（そうほう）とよばれる茎（くき）の上についたガクが下向きにそり返ったセイヨウタンポポ

図3.　3月1日付　中日新聞少女欄より

- いろいろな植物の名前がわかった．
- 標本がきれいで，とてもよい状態だった．
- 帰化種・在来種が対比して展示してあり，わかりやすかった，
- 単なる展示でなく，帰化植物の広がりの実態がわかった．
- 帰化植物の特性がわかりやすく，研究方法の紹介も興味が深かった．
- いつも気にもとめずに見過ごしていたものを，あらためて見直すことができた．
- 問題提起があり，順路の終わりで表覧解答がしてあった．
- ところどころに，花の妖精の絵があって，親しみやすく興味深く見られた．
- 葉標本だけでなく，写真や図・解説がまじった展示で，わかりやすかった．
- 全体の流れが，おせしろい表現で，見ていて楽しかった．

※わるかったこと

- 生きた実物の展示（無理でしょうが）がほしかった．
- 写真を，全標本につけるなど，自然の状態や色を，全種についてみせてほしかった．
- 外国に住みついた日本からの植物を，もっと多く説明してほしかった．
- 質問に答えてくれる人が，いつも会場にいてほしいし，学芸員の方々の説明をお聞きしたかった．
- 展示を見るだけでは，忘れてしまうことも多いので，「まとめ・解説書，などの印刷物・資料等をわけていただけたらと思った．
- 有料でもいいから，研究成果・あるいは諸資料がほしかった．
- 期限をかぎらないで，いつでも見学できるような展示にしてほしい．

以上のような意見があった．

7.　まとめとして

博物館が行なう特別な展示事業を企画するとき，植物の腊葉標本は，立体感のない平面物で．原色保持も困難で「見ばえがしない」「派手さがない」「人々を引きつける魅力に乏しい」「標本は展示資料ではない」などと言われがちで，やゝもすると，人文系の文化財，歴史的な遺物等に比べると，不当に低い資料評価しか受けていない傾向がある．しかし，たとえ道端の雑草ひとつの腊葉標本であっても，博物館資料としては，古文書・土器・陶磁器・刀剣・絵画等々の人文系資料と，対等の価値を持つものがあるはずである．また，化石や動物はく製などと同じように，展示品となりうるはずであり，それなりに自然史科学の貴重な証拠品である．腊葉標本といえども，科学的な真実を物語る実物資料として，十分に人々に訴える力を持っているはずである．

今回の資料紹介を終えて，明らかになったことをまとめると，次のようであった．

①入館者数は，社会的背景，天候その他の諸要因によって変動するはずで，特別展等の催し物だけで決まるものではないが，全般的に減少している傾向の中で，3月いっぱいは，わずかに先年度を越えた事実は，自己満足とはいえ，担当者への励ましであった．日刊諸新聞の広報

表 1. 月別入館者総数

	昭和53年度	同左催物事業	昭和54年度	同左催物事業
4月	9,561 人	28日特別展　濃飛の甲冑	8,419 人	27日特別展　濃飛の先史時代
5月	15,627	28日	17,609	27日
6月	4,392		6,547	
7月	6,621	21日特別展 世界のコガネムシ	4,511	21日特別展　世界の貝
8月	12,639	31日	8,605	31日
9月	8,309	15日資料紹介　陽徳寺1号墳	6,499	
10月	19,502	7日特別展 20日能面と装束	14,641	12日特別展　濃飛の文人
11月	13,860	19日	10,503	14日
12月	1,560		1,872	18日資料紹介 土人形と中国の仏像
1月	2,602		1,637	31日
2月	3,382		2,207	
3月	5,622	1日～31日 資料紹介　植物の世界	5,919	1日～30日 資料紹介　帰化植物
	103,677		88,969	

等の結果であるとも考えられる。

②たとえ腊葉標本という見ばえのしない実物資料であっても，ただ「もの」を並べて見せるだけの陳列でなく，時流に乗ったテーマのもとに，資料を収集し，調査研究を行ない，その成果をふまえて，確かなストーリーに沿った展示構成をすれば，見る人々を引き付ける．

③「もの」を見せることが使命の博物館であっても,「もの」を駆使して「科学的な真実」を語りかけることが中核とならねばならない．「科学的な真実」ほど，美しく，しかも感動的に世の人々の心をとらえるものはない．

④単なる腊葉標本の紹介展示だけなら，各新聞も多角的な窓から何度も取り上げ報道してくれなかったはずである．帰化植物の生態調査という地域の自然の実態を把握するという調査研究の成果があったから，その内容紹介を兼ね催し物についても案内宣伝の報道がなされたものと考えられる．

⑤展示内容の柱は，学芸員の調査研究の成果が反映されるのが本筋であり，書物からの借り物や他人の研究成果を借りたものでは，人々が博物館に期待しているものに答えることはできない．

⑥学芸活動をとりまく悪条件に，泣き事を言う前に，学芸員は，自らの立場と，博物館の社会的使命を自覚して，「何かができる……」の信念のもとに，資料収集・調査研究，そして展示を含めた教育普及活動にと，多芸員・雑芸員であることに誇りを持ち，情熱的に突走れば，何らかの道は開けてくる．

8. おわりに

博物館ブームとさえいわれる社会情勢を迎えた中で，博物館学にかかわる図書類の出版も相次いでいる．しかし，理論ばかりがはなばなしくても，現実の日本の博物館界は，その理論とは，あまりにも懸け離れた悪条件の中に置かれ，各館園とも同じような悩み，苦しみを味わい，多くの課題をかかえているのが現状ではないだろうか．博物館学理論が多々展開される中で．博物館活動の実践研究報告は，まだまだこれからとの感を持つのは，私ひとりではないと思う．ほんのささやかな実践報告ではあるが，全国各地で，悪戦苦闘をされている学芸員諸兄に，少しでも参加になればと，さらに，今後こうした実践研究報告の広まりと深まりに役立てばと願い報告した．

おわりに，この間の実践の歩みについては，本館前館長松尾克美先生をはじめ，館の職員の方々の深い理解ごと支援を得た．資料紹介展については，学芸部会での研究討議を得，自然分野の諸先生方の共同作業によって開催したものである．とりわけ，前自然係長野村豊先生には，実践研究全般に渡って，終始ご助言とご指導，励ましを得た．ここに，これらの全ての方に，深く感謝の意を表する．